

# 『和日庵』 鳴海要吉の生涯 (パネル展)

同時開催：上林暁草稿「自分の町」 生原稿展〔展示ケース内〕

私の住む界限——杉並區天沼二丁目庚申湯の付近を、朝に晩に、飄々と歩いてゐる一人のお爺さんがある。別に用がありさうには思へない。風呂の行きかへりに洗面器を提げてゐるほかは、いつも細身の洋杖をついてゐる。かなりひどい猫背で、短く刈つた口髭の下に、出つ張つた齒をあらはして、一人で歩きながら笑みかたまけた顔をしてゐる。長い白髪が汚れたソフトからはみ出して、耳にかぶさつてゐる。

一體、あのお爺さんは何んの用事があつて、またどんなことを考へながら、道を歩いてゐるのだらうと、ひとは思ふにちがひない。一見して、時代離れの風態をしたお爺さんである。今頃、手縫ひの白ネルのシャツを着てゐるだけでも珍しいであらう。私なども子供の時にはあれを着たが、もう久しく忘れてゐたものである。紛れもなく陋巷にくすぶつてゐる人には間違ひないとして、人品は決して卑しくない。むしろ品格に富んでゐる。古びた帽子を冠り、ちびた下駄をはいてゐても、それらを生かして身につけてゐる感じである。田舎者かと思つてゐると、どこか洒落がかつて見える。とにかく、何か曰くのありさうなお爺さんに見えることは事實である。

この人の家は、私の家の並びで、北の方へ三軒間をおいて、高崎といふ屋敷の竹圍ひに抱へ込まれた小さな家が、それである。三洲屋といふ酒屋の物置と並んでゐるので、うっかりするとそれと見紛ふかも知れない。門の扉も竹垣の中に嵌つてゐて、一寸身分けにくい。この夏から秋にかけては、竹垣に朝顔の蔓が絡んでゐて、長い間毎朝花が咲いた。白い縁取りをした薄紅色の花で、五輪六輪と咲くことは珍しかった。大抵三四輪であつた。竹垣の間には、うちから郵便受が口を開いてゐる。朝顔の花は、この郵便受の口を覗き込むやうに咲いてゐることもあつた。手製の郵便受で、「なるみ」と書いてある。同じく手製の表札が門柱に懸かつてゐて、「鳴海要吉」と書いてある。

『文藝』昭和三十一年三月號、『春の坂』

会期：令和4年（2022年）5月2日～7月13日

〔開館時間〕 平日 10：00～18：00 〔休館日〕 毎週木曜日、祝祭日  
土日 10：00～17：00

上林暁文学館